

竹生島蓮華会の成立

Establishment of the Chikubushima Renge-e

小林 あづみ

KOBAYASHI Azumi

要旨：竹生島における最大の行事である蓮華会について、以下の3点を指摘した。

- ・ 禪観経典のひとつ『観仏三昧海経』が思想的基盤となっている。
- ・ 当初より祀られていた尊格ではなく、弁才天を行事の対象とした理由として、竹生島所属の宗門分裂による自派の独自性の主張や、気候変動による人々の神に対する考え方の変化を想定できる。
- ・ 後代、蓮華会は良源（第十八代天台座主）による創始をうたい、良源の母の存在もクローズアップされたが、その背景には安居院の僧侶たちによる宗教的戦略があった。

Abstract: This article points out three things about the Renge-e, Chikubushima's largest ceremony:

- The ideological foundation is the “Kanbutsu Samaikai-kyo Sutra.”
- The reason for choosing Benzaiten as the object of the ceremony, rather than the original deity worshipped, was due to a split within the sect to which Chikubushima belonged, which led to an assertion of the sect's uniqueness, and to changes in people's attitudes toward gods due to climate change.
- In later years, the Renge-e was touted as having been founded by Ryogen (the 18th Tendai Abbot), and the presence of Ryogen's mother was also highlighted. Behind this lay the religious strategy of the monks of Agui.

キーワード：竹生島、蓮華会、弁才天 『観仏三昧海経』、良源、安居院

Key Words：Chikubushima, Renge-e, Benzaiten (Sarasvati), “Kanbutsu Samaikai-kyo Sutra”, Ryogen, Agui

はじめに

琵琶湖に浮かぶ竹生島は、古来より信仰の対象となった島である。文献上の初見は『帝王編年記』養老七年(723)条であり¹、夷服(伊吹)岳の多々美比古命と浅井岡の浅井比咩命が高さを競い、一夜にして高くなった浅井比咩が多々美比古に首を切られ湖に下った地とされる。その後、僧侶の来島が続き千手観音が祀られる。平安期以降は天台僧たちの来島により山門(第三代天台座主、円仁の門徒)の聖地となり弁才天を本地仏とした。複雑な信仰形態を持つ島であるが、本稿では島の最大の行事である蓮華会を採り上げ、その構成や成立に関して考察を加える。

1. 竹生島蓮華会の概要

五来(2009)は、竹生島蓮華会の概要を以下のように述べる²。

蓮華会は修験道の山の行事として知られている。すなわ

ち山伏の夏の峰入りのあいだの花供入峰にあたる。(中略)蓮華の造花とたくさんの瓢箪を頂につけた花傘が出たので知られる。元徳二年(一三三〇)の「竹生島文書」では平安中期にはじまったとあり、弁才天に雨を祈る行事だった。この行事の費用は東浅井郡と西浅井郡の長者が「蓮華の頭」となって負担するので、一度これをつとめると「蓮華の長者」と呼ばれて、最高の榮譽とされた。しかしこのように華美な行事になる以前は、「蓮華の頭」は竹生島弁天(水神)の尸(よりまし)となって託宣する儀式があったものとおもわれる。そしてこの水神の依代となったのが、水神のこのむ瓢箪と蓮華の造花をつけた花傘だったのである。

『妙法蓮華経』の「蓮華」が法会のシンボルとなる蓮華会は天台系寺院で執り行われることが多い。したがって吉野山や鞍馬山の蓮華会に関する研究も多いが、竹生

島の場合、他の寺院とは異なり験較べなどの行事は蓮華会の記録には残らない。なお、佐々木（1987）³等によれば、現行の行事は

- ・毎年六月十五日（現在は八月十五日）に執行。
- ・浅井郡所縁の者から選ばれた二組の頭人夫婦が六月初頭にそれぞれの屋敷の庭に設けられた弁才天の仮屋へ、竹生島から榊を依代とした弁才天を迎え祀り、十五日に榊を再び竹生島に送り返す。
- ・榊とともに神霊の依代として、御正体、瓢箪と蓮華の造花をつけた花傘、および新しく造立された弁才天像一軀が神輿船を仕立てて竹生島に船渡御し、頭人夫婦を迎え弁才天開眼供養の法会が営まれる。

といった内容で、船渡御などを含む独特の行事であることがわかる。このような行事について、多角的なアプローチが可能であるが、藪（2024）⁴では諸史料を整理し

- ・蓮華会の創始として位置づけられる『慈恵大僧正拾遺伝』に記載された、良源による『法華経』百部書写と龍頭鷯首船による船楽の記事は、竹生島に弁才天が祀られる初見史料の十二世紀よりも百年以上も遡ることや、『竹生島縁起』（「承平縁起」「護国寺本」）の記述との相違、龍頭鷯首船は貴顕が利用したこと等から慎重な検討が必要である。
- ・蓮華会の由緒を良源に求める動きは、鎌倉期の慈恵大師信仰隆盛下で形成され、祭礼の権威が高まったことにより、頭役への強制力が強まった。良源の伝承のちに説話化され広がった。
- ・十三世紀前半の山門による関与の増大により、蓮華会の壮麗化が推し進められ、竹生島への支配力が強まった。

ことを指摘した。本稿では以上の論をふまえて蓮華会の行事内容に焦点を当て、蓮華会の成立について若干の指摘をおこなう。

2. 竹生島蓮華会の創始

本項では竹生島蓮華会に関わる史料を原則として年代順に挙げ、内容の変遷を確認する。（以下、史料の順に①、②と番号を付す。下線部は引用者による。（イ）は諸本の校訂を意味する。旧字体は新字体に改め訓読は必要な部分のみ示す。）

①「権律師実遍文書紛失状案」 建久三年（1192）⁵（前略）

一、近江国浅井郡内竹生嶋

件嶋者、弁才天垂跡之霊地、行基菩薩建立之精舎也、菅

浦在家田島一処、是皆雖為狭少所、依為往古施入之領、所記載也、就中早崎者、権現祭礼之遊行所、菅浦者不断常燈所進地也、

建久三年十一月 日 権律師法橋上人位実遍（後略）

藪（2024）を参考にすれば、以下のように当時の竹生島における祭祀の状況が確認できる。

- ・後白河院時代の混乱による檀那院の庄園の証文紛失について、檀那院検校の実遍が左右京職に申請。
- ・竹生島の弁才天と行基建立の精舎について言及。
- ・菅浦（燈明）・早崎（遊行所）の施入。
- ・弁才天の祭祀は実施されているが、後の史料にみえる良源（慈恵）とは結び付いていない。
- ・船渡御の記述なし。対岸の早崎での祭祀が中心か。

しかし、この文書は偽文書の疑いが指摘され議論がある⁶。本稿では、当該文書が暦応元年（1338）の訴訟で初めて利用されたことから偽文書かと考える。また、蓮華会に関する部分については、訴訟において菅浦の立場を優位にするため必要な事項しか記述せず、訴訟相手が寺門円満院領であるため、（寺門と対抗する山門の）良源への言及がないのは意図的かとも考えているが、当時の祭祀の一端は反映されているだろう。

②『溪嵐拾葉集』「弁才部末私苗」（光宗（1276-1350）著 文保二年（1318）序⁷）

一。六月蓮花會事 相伝云。慈恵大師始行也。此奈礼儀式者。造大鳥巖船也。神事終此鳥切破沈海底也。金翅鳥骨入海中。表成如意宝珠也。鳥骨宝珠此謂也

当該史料では

- ・良源（延喜十二（912）- 永観三・寛和元年（985）第十八代天台座主、延暦寺中興の祖）の創始。
- ・船渡御の執行。金翅鳥の造り物を神事ののちに沈める。（史料④『観仏三昧海経』の影響）
- ・金翅鳥の「骨」に言及。「骨」は釈迦の遺骨 = 舍利 = 如意宝珠とされる。

が付加していることがわかる。金翅鳥の造り物が果たす役割については、後述するが、著者である光宗の師、興円（1262-1317 円頓戒復興をめざし、「戒灌頂」を創始）の以下の記述が、蓮華会における弁才天と如意宝珠の関係を理解する上では参考になる。

『円戒十六帖』⁸

示云。戒体如意宝珠ト者。真言ニテハ弁才天ノ三摩耶形也。戒家ニテハ。九重之淵ノ底コリ龍ノヲトカヒノ下ノ珠ト者此事也。依之一心戒序云。夫聞。倉海之裏有驪龍ノ珠。三教ノ色天モ不見彼質ヲ。諸宗ノ秀賢モ非識其色ヲ文是ハ前仏ノ舍利也。舍利者戒体也。此体変テ成弁才天ト守護此戒体ヲ也。(中略)以仏舍利ヲ習戒体ト事ハ。三世諸仏ノ成道ハ皆由受戒ニ。以戒行ヲ利衆生ヲ給也。釈尊モ依遮那教敕ニ受戒ヲ成道給ヘリ。其ノ皮肉骨之ヲハ戒体・戒相・戒行ト習也。戒体ト者身ノ骨也。身骨ト者舍利也。故ニ以仏舍利ヲ為戒体ト也。

仏舍利を仏像に込め生身化する例は、重源(1121-1206)による東大寺大仏再建時に大仏胎内に仏舍利を納入し「擬生身仏⁹」とされたことなどが有名であり、当該史料における身体性が顕著な如意宝珠観も、竹生島弁才天が「生身弁財財座故。叡山仏法繁昌云云¹⁰」等、「生身」と称されることにも結び付いているといえよう。

③『竹生嶋縁起』(「応永縁起」, 普文編述, 応永二十一年(1414))¹¹

(前略)

天台第十八座主三朝国師慈恵大師、初任当嶋掎授執行職、興隆千万端(給イ)、其中六(月イ)蓮華会其随一也、私伝曰、此大師者、御母祈精(請)大悲観音。奉祈子之時。夢見安坐海中向大虚(虚空)開懷受日光云々。其後懷妊。仍此嶋大弁才天(女イ)化現也、奇瑞惟多、斯会之儀式者造大鳥巖船於海中而祭之、後切破入海中、是則金翅鳥没後、彼鳥心臓随(墮イ)入海中成如意宝珠、驪龍収領下、降雨七珍万宝、於一切事除怖畏急難意(表相イ)也、天下泰平(国土安穩イ)、五穀豊饒、併依此祭会、(也イ)自爾已来、大師門弟執行別当相統(之イ)、于今不絶(後略)

当該史料には

- ・良源の竹生島関与に関する記述の増大、門弟による相統。
- ・良源母の懷妊エピソードと弁才天を関連づける。(母が祈ったのは観音であり、齟齬がある)
- ・驪龍への言及。(史料②のうち、『円戒十六帖』の影響か)
- ・金翅鳥(の心臓)と如意宝珠の関連。金翅鳥に関する記述は史料②の「骨」から「心臓」へと変化し、『観仏三昧海経』の記述に忠実になった。

といった特徴が見られる。このうち金翅鳥の造り物については、『観仏三昧海経』の以下の記述からの影響を指摘できる。

④『仏説観仏三昧海経』卷第一(仏陀跋陀羅)¹²

復次父王。閻浮提中及四天下。有金翅鳥。名正音迦楼羅王。於諸鳥中快得自在。此鳥業報應食諸龍。於閻浮提日食一龍王及五百小龍。明日復於弗婆提。食一龍王及五百小龍。第三日復於瞿耶尼。食一龍王及五百小龍。第四日復於鬱单越。食一龍王及五百小龍。周而復始經八千歳。此鳥爾時死相已現。諸龍吐毒無由得食。彼鳥飢逼周障求食了不能得。游巡諸山永不得安。至金剛山然後暫住。從金剛山直下至大水際。從大水際至風輪際。為風所吹還至金剛山。如是七返然後命終。其命終已以其毒故。令十宝山同時火起。爾時難陀龍王懼燒此山。即大降雨澍如車軸。鳥肉散尽惟有心在。其心直下如前七返。然後還住金剛山頂。難陀龍王取此鳥心以為明珠。轉輪王得為如意珠。仏告父王諸善男子及善女人。若念仏者其心亦爾。

復た次に父王よ、閻浮提の中、及び四天下に金翅鳥有り。正音に迦楼羅王と名づく。諸鳥の中において快(よ)く自在を得たり。此の鳥、業報にて應に諸龍を食すべし。閻浮提において日に一龍王と五百の小龍を食す。明日にまた弗婆提において一龍王と五百の小龍を食す。第三日にまた瞿陀尼において一龍王と五百の小龍を食す。第四日にまた鬱单越において一龍王と五百の小龍を食す。周(めぐ)りてまた始めて八千歳を経る。此の鳥、爾の時に死相已に現ずれば諸龍、毒を吐き、食を得るに由なし。彼の鳥、飢逼りて周障して食を求むるも了(つひ)に得ること能はず。諸山に遊巡するも永く安を得ず。金剛山に至りてしかる後に暫く住す。金剛山より直ちに下り、大水際に至る。大水際より風輪際に至るに風の為に吹かれ還りて金剛山に至る。是の如く七返し、しかる後に命終す。其れ命終し已れば其の毒を以ての故に十宝山をして同時に火を起さしむ。爾の時、難陀龍王、此の山を焼くを懼れ、即ち大いに雨を降らし、澍(そそ)ぐに車軸の如し。鳥肉、散尽して惟だ心有るのみ。其れ心在れば直ちに下りて前の如く七返し、しかる後に還りて金剛山の頂に住せり。難陀龍王、此の鳥の心を取りて以て明珠と為し、轉輪王は如意珠と為すを得たり。仏は父王に告げ給へり。「諸の善男子及び善女人は、若し念仏すれば其の心、また爾るべし」と¹³。

『観仏三昧海経』は、仏の色身・仏像を正念をもって

観想し、真身とその境界を観るに至る三昧体験と、その境地を獲得するための実践を説き明かした經典で『観無量寿経』との類同性が指摘される¹⁴。構成は十卷十二品からなり、前半六品が釈迦の父である浄飯王を主たる対告者とし、後半は阿難がその位置を占める。観仏の対象は前半七品は釈迦を、後半は仏一般、十方諸仏などへと拡大する。引用した第一卷は、仏涅槃後の衆生がいかに仏身の色相を観ずべきかを父王が尋ね、釈迦が見仏修得の法を六種の譬を用いて説く内容であるが、六種のうちの第三番目の譬に金翅鳥が登場する。この譬によって、

- ・ 諸鳥の中で自在を得ることにすぐれた金翅鳥は、仏心と煩惱心(=自在の心)を有する人間の譬である。
- ・ 金翅鳥の心臓の譬は如来蔵思想を反映する。
- ・ 念仏の心は金翅鳥のように衆生の心を明珠に転換する。(念仏行の効果)

ことが明らかになる。このような『観仏三昧海経』の天台における受容については、

- ・ 『法華文句』(智顛)：『観仏三昧海経』の説く白毫相を通して中道に達する観法を強調する。
- ・ 『往生要集』(源信)：五八回の引用。引用經典のなかで最多であり、「諸仏の相好ならびに観相の滅罪を明すことは観仏三昧経にしかず¹⁵」といった文言がみられる。

など強い影響がある。蓮華会はこの經典内容を行事に織り込むことによって、

- ・ 天台の高僧、源信の著名作で多く言及される經典に依拠し、行事に思想的な基盤(如来蔵)を与えた。『往生要集』で源信は念仏三昧行の根本は梵網戒の持戒にあるとしたが、日本の天台浄土教は持戒についても本覚思想を背景とした唯心思想による教相へと変容している¹⁶。前述の『円戒十六帖』や『溪嵐拾葉集』にもみられる変容(金翅鳥の心(骨)と念仏)を用い弁才天を生身化し行事をアップグレードした。
- ・ 他の禪観經典類とは異なり、釈迦を観想対象とする經典に依拠し、竹生鳥が(後述する岡野(2024)に言及される比叡山舍利会の釈迦信仰と結び付く)釈迦とのかわりが深い聖地であることを示す。
- ・ 經典中の、金剛山より直下する金翅鳥の姿は、竹生鳥に当初より祀られる浅井比咩のエピソードと重ねられる。

といった特徴を有することになったのである。

3. 良源と弁才天登場

蓮華会への良源の関与については、以下の史料が年代の早いものとして知られている。

⑤『慈恵大僧正拾遺伝』(梵照)(長元五年(1032)序)¹⁷(前略)

同年(=貞元二(977))於近江国浅井郡竹生嶋、書写法花経一百部、是為莊嚴弁才天、兼為報生地之恩。法会已後、請僧乘船廻嶋散花、同音讚歎、樂人供奉打一鼓焉、乘龍頭鷁首船。(後略)

当該史料からは、

- ・ 近江国浅井郡出身の良源による法会(『法華経』を弁才天に供養)が蓮華会の創始と位置付けられる。
- ・ 金翅鳥に関する記述なし。
- ・ 龍頭鷁首船での法楽を伴った。

といった特徴を指摘できるが、先述のように藪(2024)では、

- ・ 時期的にカバーできる筈の「承平縁起」(護国寺本『諸寺縁起集』所載、承平元年(931)の年紀。永祚元年(989)の記事の追筆、康永三(1344)あるいは四年写)に良源・弁才天・龍頭鷁首船に関する記述がなく、この法会は歴史的事実とは認めがたい。

と指摘している。当該史料については下記のような点から確かに内容の検討には慎重を要する。

- ・ 奥書部分：誤脱の多い本と評価される。「写本不詳文字□雖多之、任本写之、以他本可零校合之」¹⁸
- ・ 延長七年(929)条(承平四(934)あるいは五年)¹⁹：智証(円珍)門徒主催の法華八講に堅義の問者として招かれ、堅者千観を論破する記事
→因明を得意とする千観を論破することで良源の優位性を記すが、実際は、千観は良源より六歳ほど若く、受戒後一年前後であった。
- ・ 天元三年(980)九月三十日・十月一日条：比叡山根本中堂落慶・文殊楼会の記事
→参登者のひとり源惟正(参議・修理大夫)は同年四月に薨去。

以上のように、良源を高く位置付ける目的や事実混同を指摘できる記事が散見される。竹生鳥弁才天と蓮華会に関する記事⑤もそのひとつと位置付けることができる。この記事の背景として、比叡山内における円仁(794-864 第三代天台座主)と円珍(814-891 第五代天台座主)の門徒たちの主導権争いを指摘できる。良源は円仁門徒であり、それまで円珍派が主流であった天台座主の地位を円仁派へと転換したことで知られる。その後両派の対立が深まり、正暦四年(993)に円珍門徒は比叡山を下り、園城寺に拠点を構えることとなった。

ただ良源を支援した藤原摂関家はその後円珍派を重用していたことから、円仁派は自派の優位性を主張するために、比叡山が摂関家と親密な関係を築く元となった良源を称揚することになった。そのため、

- ・長元三年（1030）：慶命（第二七代天台座主）による良源供養（薨後四五年）で、捧げられた嘆徳文（「大師」号を下賜されていない良源を「慈恵大師」と尊称。『慈恵大僧正拾遺伝』の独自記事）には「国之師、仏家之棟梁、法侶之賢哲」「釈迦如来之重出、慈覚大師再生」²⁰といった良源を賛美する語句が散見される。
- ・翌年、長元四年九月：『慈恵大僧正伝』成立。
- ・さらに翌年、長元五年正月：『慈恵大僧正拾遺伝』成立。といった良源称揚が集中したことが指摘できる。

社寺縁起に関して、岡野（2024）²¹では、平安中期の偽作（初祖が自ら記した形式をとる）寺院縁起の特徴を、

- ・新たな神格・聖地の登場（園城寺の新羅明神など。比叡山舍利会の釈迦信仰に対する園城寺龍華会の弥勒信仰・天智天皇由来を挙げる）
 - ・寺院経営に関する問題解決のための指針（園城寺における受戒・灌頂・法会の延暦寺からの独立など）
 - ・世俗権力に対する自己主張（由緒を世俗権力との関係史等を用いて力説。上級貴族を読者に想定）
- を挙げるが、（竹生島を弁才天とのかかわりを持つ聖地として縁起的に記述される）『慈恵大僧正拾遺伝』においても、竹生島弁才天の登場、良源が不動明王の姿に変わり不動明王の化身とされたこと（独自記事）、多くの華やかな法会、摂関家からの莫大な荘園施入といった記述は、同様の特徴を有し、比叡山における円仁、円珍両門徒の対立のなかからこのような記述が生まれたと考えられる。

なお、弁才天の登場した時代については、笹生（2020）²²（2023）²³による

- ・木の年輪に残された酸素同位体の傾向から、九世紀後半から十世紀は湿潤と乾燥が短期間で激しく変化する、特異な気候変動の時代であった。
- ・九世紀の後半から十世紀にかけて、琵琶湖の水位が上昇し、塩津の神社は水没した。その後十一世紀後半に神社は復興するが、地形・環境変化のため、『延喜式』に記された古代の神々とは異なる新たな神々が登場した。
- ・十世紀の環境変化は神祭りと、そこにおける神の考え方「神観」に大きな変化をもたらしていた。
- ・天慶年間（938-947）、大きな社会不安のなかで民衆は、地域間を神輿で移動し、広域に多数の民衆の欲求をか

なえてくれる神々と祭りの形を生み出した。民衆は、靈験のある神々を神輿に戴き大勢で担ぎ、賑やかに歌舞することで大きなストレスと不安を解消したのでらう。

といった指摘があり、竹生島における弁才天（靈験性、移動、華美といった特徴を持つ）の登場²⁴も、気候変動等による神に対する考え方の変化を理由の一つとして挙げることができるだろう²⁵。

4. 安居院流と竹生島弁才天

2において史料④『観仏三昧海経』が蓮華会の思想的基盤となったことを述べたが、この如来蔵的な志向に加え、史料③の唐突ともいえる良源の母の登場については、安居院流（比叡山の里坊のひとつ、安居院に住した説教師の流派、澄憲（1126-1203、能説で知られる）を開祖として実子聖覚（1167-1235）以降も血統相続した）からの影響を指摘したい。

⑥『転女成仏経』：平安時代中期より女性が願主、あるいは被供養者の場合に写経・経供養の際に『法華経』とセットになった経典。女性の即身成仏を説く。（前略）

一切女身、是皆為三世仏母、辟如大海大地女身此如来蔵、為応化仏身、為万物蔵²⁶（後略）

この内容が、澄憲の有名な説法に影響を与えているとされる²⁷。

⑦『玉葉』寿永元年（1182）十一月二十八日条²⁸（前略）

導師參上、〈澄憲僧都〉、即事始、説法優美、衆人拭涙、於澄憲可謂得日、誠珍重也、此中釈云、一切女人ハ、三世諸仏眞実之母也、一切男子ハ、非諸仏眞実之父、故何者、仏出世之時、必仮宿胎内、縦為権化胎生之條無論、於父者無陰陽和合之儀、身体髮膚不受其父、仍無父子之道理之故也、依之言之、女者勝男者歟云々、此事、尤可謂珍事有興之言、（後略）

この説法にみられる母（如来蔵）の重視について、小峯（2009）²⁹は以下のように指摘する。

父信西入道は平治の乱で殺害され、澄憲ら子供たちも配流の憂き目にあう。（中略）また澄憲は聖覚の父となり、安居院の法脈を確立するものの、公然たる妻帯への周囲の批判が強かった。（中略）澄憲は自己正当化も合わせ、

悲母の供養の重視を安居院の教線拡張や権威化の戦略としたのだろう。(中略) 悲母に重きをおく唱導活動の根拠や規範を澄憲の教釈は与えたのである。

むろん、史料⑥の女人成仏、史料⑦の母の敬重は、識字能力や経済力を持つ、高位の女性壇越への働きかけという意義も有したであろう³⁰。さらに澄憲は史料④『観仏三昧海経』を多く引用する『往生要集』の講説³¹も行い、著作『往生要集疑問』も執筆している。

竹生島との関係に焦点をあてれば、子息の聖覚も竹生島との関係を所領の上で有したようである。

⑧「門業記」巻第九³²

一、桜下門跡莊園等 甘露寺在松崎 穴太園在東坂本伊豆山 箱根山 大学寺伊勢国 国友庄近江国 安養寺丹波国 件庄蘭伝領之輩為尪弱之間。每処違乱。爰権少僧都聖覚領掌之後。為小僧房領。仍經院奏達執政多以令落居了。然而国友庄為其本而未被返付之間。円仏写経用途所令不足也。所領雖似有。員地利誠有若亡。彼沙汰切畢之後可令一定歟。件領等可令聖覚僧都門跡永領掌也(中略) 建永元年 月 日 知寺前大僧正。

(前略) 件の庄園伝領の輩、尪(おう)弱たるの間、每処違乱さるるなり。爰(ここ)に権少僧都聖覚領掌の後、小僧房領たり。仍て院の奏達を経て、執政多く以て落居せしめ了んぬ。しかれども国友庄は其の本として未だ返付せられざるの間、円仏写経用途、不足せしむる所なり。所領有るに似たりといへども、員地の利、誠に有若亡。彼の沙汰切り畢へるの後、一定せしむべきか。件の領等は聖覚僧都、門跡として永く領掌せしむべきなり³³。

(後略)

当該史料に見える「穴太園」について、清水(2022)³⁴では

- ・「応永縁起」に記載される竹生島の神職は穴太氏である。
 - ・穴太園を領有していた聖覚が慈円(第六十二、六十五、六十九、七十一代天台座主)に譲ることにより、竹生島と比叡山が結ばれた。
 - ・聖覚は慈円から託された桜下門跡領の管理など、強大な経済力を背景に、供養、復興、布教を担った。
- と指摘する。その他にも武(2008)³⁵では、聖覚は一万体の慈恵大師供養を修するなど「慈恵大師に対する信仰的な敬慕」を抱いていたことも指摘される。このような

安居院流諸師の竹生島弁才天とのかかわりは、史料②に挙げた『溪嵐拾葉集』(の後述部分)に以下のように結実している。

一。少納言入道信西感得生身弁才天事 師物語云。信西被詣竹生島之時。暗夜ニ水中ニ明月有ケリ。水練仕ヲ以テカツカセタリケレハ。円キ石ノシラカリケル面ニ白石アリ。スキトホリタル中ヲ見ケレハ龍ノ下シ子アリ。是ヲ感得壇上ニ安置シテ勤行セラレケリ。速疾悉地成就ス。其生身于今安居院流ノ重宝也。仍彼門流繁昌シケリ云云³⁶。

清水(2022)³⁷が指摘するように、安居院流唱導が繁栄した宗教的背景を、澄憲の父、信西(1106-1160 琵琶の奏楽でも知られる)に置き、竹生島の弁才天信仰に結び付けた記述である。

以上から、安居院流の諸師は、竹生島弁才天への信仰をバックボーンとし、良源信仰、『往生要集』への深い理解、如来蔵思想と重ね合わせた母への敬慕の称揚、竹生島に奉仕した穴太氏との関わりと経済力を持つことが確認できる。これらの要素は全て、竹生島蓮華会の思想的基盤や、良源と母の関与を謳う縁起類、豊かな経済力を必要とする華やかな法会のありよう等へと繋がるのを見てとることができるのである。

おわりに

竹生島蓮華会の成立について、その変遷の背景を探ってきた。結論としては冒頭に挙げた通りであるが、補足として本稿では触れなかった論点を述べる。

・藪(2024)で疑問視された、『慈恵大僧正拾遺伝』所載の良源による龍頭鷁首船の法会は、竹生島周辺の波の荒さ、風の強さといった点からも困難ではないか。(龍頭鷁首船による奏楽は、通常は水面が穏やかな池で行われる)

・『慈恵大僧正拾遺伝』の独自記事の分析。

竹生島は昨年(2024年)開創一三〇〇年記念の御開帳があり、観音菩薩と弁才天を拝した折に収集した資料群が本稿の元になっている。また、本稿は藪元晶氏のご論考を手元に置きながら執筆した。私事ではあるが家族に不幸があった頃に届いたご論考を読み込むことによって、精神的にも救われることになった。深く感謝申し上げます。また、以下の諸機関(の諸氏)にも厚く御礼申し上げます。

高尾山薬王院(琵琶滝)、日本山岳修験学会(伊勢学術

大会), 木簡学会 (但馬特別研究集会), 律院, 拜島大師本覚院

- ¹ 廣岡義隆, 『風土記考説』, 和泉書院, 令和四年 (2022), p.133-155 (神宮文庫本『帝王編年記』を校訂) 「江」 「比古」といった古用法から, 上代文献であると認める。なお, 葛籠尾崎湖底遺跡の調査により古墳時代以降の土器 (酒などをいれる杯, 祭祀に利用されたか) が確認されており, 古代の祭祀に関しては今後の研究の進展が俟たれる。
- ² 五来重, 「仏教行事と花」 (『五来重著作集』 第八卷), 法蔵館, 平成二一年 (2009), p.451-452
- ³ 佐々木孝正, 『仏教民俗史の研究』, 名著出版, 昭和六二年 (1987), p.217
- ⁴ 藪元晶, 「「慈恵大師竹生島蓮華会始行伝承」の成立について—『御影史学論集』 四九へへの疑問も含めて—」 (『御影史学論集』 四九), 令和六年 (2024) 10月
- ⁵ 『鎌倉遺文 古文書第二巻』 六四二, p.55
- ⁶ 黒田日出男 『中世荘園絵図の解釈学』 東京大学出版会 平成一二年 (2000) p.183-227では他の文書との齟齬や様式面より疑問視する。水野章二 「天台檀那院と近江菅浦」 (『滋賀大学経済学部附属資料館研究紀要』 五五 令和四年 (2022) 3月) は本来の紛失状に竹生島の記述を加筆したものとする。
- ⁷ 大正蔵七六 p.626
- ⁸ 『統天台宗全書 円戒部 1』 p.88
- ⁹ 『東大寺造立供養記』 (『群書類従』 第二四輯) p.404
- ¹⁰ 『溪嵐拾葉集』 大正蔵七六 p.625
- ¹¹ 『神道大系 神社編二十三 近江国』 p.512
- ¹² 大正蔵一五 p.646
- ¹³ 大南龍昇著, 大南龍昇先生仏教学論集刊行会編纂, 『見佛一起源と展開—』, てるふる, 令和五年 (2023), p.322, 332-333
- ¹⁴ 以下, 大南 (2023), p.237, 251-271
- ¹⁵ 『日本思想大系 六 源信』 p.137
- ¹⁶ 柳澤正志, 『日本天台浄土教思想の研究』, 法蔵館, 平成三〇年 (2018), p.268-279
- ¹⁷ 『大日本史料』 一編二十二冊 p.5
- ¹⁸ 平林盛得, 『聖と説話の史的 연구』, 吉川弘文館, 昭和五六年 (1981), p.28
- ¹⁹ 平林盛得, 『良源 人物叢書 新装版』, 吉川弘文館, 平成二八年 (2016), p.18
- ²⁰ 川勝賢亮, 『元三・慈恵大師良源の歴史文化史料』, 岩田書院, 令和三年 (2021), p.100-101
- ²¹ 岡野浩二, 「平安中期の偽作寺院縁起—高野山・園城寺・四天王寺—」 (『駒沢史学』 一〇二), 令和六年 (2024) 2月
- ²² 笹生衛, 「塩津港の神と神社」 (水野章二編著, 『よみがえる港・塩津 北国と京をつないだ琵琶湖の重要港』, サンライズ出版, 令和二年 (2020) 所収), p.67-69
- ²³ 笹生衛, 『まつりと神々の古代』, 吉川弘文館, 令和五年 (2023), p.168
- ²⁴ 「護国寺本『竹生島縁起』には弁才天に関する記述は一切見受けられず, 大江匡房 (1041-1111) の談話を藤原実兼 (1085-1112) が筆録した『江談抄』が竹生島における弁才天信仰を示す初例と思われる。本書は, 平安時代の漢詩人・都良香 (839-79) が竹生島に参詣した際に詠んだ句を載せ, 句の下七句を「嶋主の弁才天」が告げたものという説話を載せる。『江談抄』の成立時期は諸説あるが, 少なくとも十二世紀の初頭には竹生島の弁才天が世間に広まっていたことが窺える。護国寺本『竹生島縁起』が十世紀末に成立していたとすると, 竹生島に弁才天が安置されるようになったのは十一世紀中であろう。」 (坂口泰章, 「竹生島弁才天考—中世における信仰を中心に」 (長浜市長浜城歴史博物館, 『竹生島弁才天—仏から神へ, その信仰の展開』, 令和二年 (2020) 所収), p.43)
- ²⁵ 塩津港遺跡出土木簡には, 竹生島弁才天に関する言及はあるが, 浅井比咩に関する言及はない。濱修, 「塩津起請文の世界」 (水野 (2020) 所収), p.125-126等参照。
- ²⁶ 西口順子, 「「転女成仏経」攷」 (『日本仏教総合研究』 八), 平成二二年 (2010) 5月, p.3
- ²⁷ 西口順子, 『女の力 古代の女性と仏教』, 法蔵館, 令和七年 (2025), p.84
- ²⁸ 『玉葉』 中巻 p.584
- ²⁹ 小峯和明, 『中世法会文芸論』, 笠間書院, 平成二一年 (2009), p.118-122
- ³⁰ 原口志津子, 「本法寺蔵「法華経曼荼羅図」に見る龍女と金翅鳥の図像ほか二、三の問題」 (『描かれた法華経 本法寺蔵「法華経曼荼羅図」の時空』, 勉誠社, 令和七年 (2025) 所収), p.163
- ³¹ 『玉葉』 文治三年四月九日条
- ³² 大正蔵 図像部十二 p.11
- ³³ 今井雅晴, 『親鸞聖人と箱根権現』, 自照社出版, 平成二七年 (2015), p.50-51を参考にした。「尪弱」= 弱弱い, 「院」= 後鳥羽上皇, 「円仏」= 僧侶の名, 「有

若亡」 = 有名無実の意.

³⁴ 清水真澄, 『安居院の研究—能説の系譜と水系の信仰』, 三弥井書店, 令和四年 (2022), p.11-13, 20, 165-167, 284

³⁵ 武覚超, 『比叡山仏教の研究』, 法蔵館, 平成二〇年 (2008), p.284-289

³⁶ 大正蔵 七六 p.627

³⁷ p.12-13